

山月記

映画文学人生論

中島敦 (1909-42)
『山月記』 (1942) 「文学界」
『弟子』 (1943) 「中央公論」
『李陵』 (1943) 「文学界」
『斗南先生』 (1942) 「遺稿」

隴西の李徴は博学才穎、
性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、

『山月記』をはじめ中島敦の小説を私が読んだのはつい最近のことである。『山月記』は高校の教科書に何度も採用されているらしいが、私が高校生だった頃の教科書にはなかった。

隴西（ろうさい）の李徴（りちよう）は博学才穎（さいえい）、天宝の末年、若くして名を虎榜（こぼう）に連ね、ついで江南尉（こうなんい）に補せられたが、性、狷介（けんかい）自ら恃（たの）むところ頗（すこぶ）る厚く、賤吏（せんり）に甘んずるを潔（いさぎよ）しとしなかった。

この書き出しの文章のように、難しい漢字が多用されている。振り仮名がなければ、とても読めない。しかし、声を出して音読すれば、リズムが心地よく、生理的な快感がひろがってくる。

主人公の李徴の生き方には同情できる。官吏任用試験に合格して進士になるほどの秀才だが、自尊心が強すぎて、協調性にとぼしく、とうとう発狂し、虎になってしまった。

人間が虎になる——現実にはあり得ない話である。しかし、虎のような人間なら世の中にくらでもいる。そんな人間を虎に寓して、一篇の小説にしたという変身譚のようだ。



山月記

映画文学人生論

李徴の場合、虎は不遇の詩人の化身だ。賤吏に甘んずるを潔しとしない彼は故山に帰臥し、人と交を絶って、ひたすら詩作に耽った。下吏として長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたが、文名は容易に上がらず、生活は日を逐うて苦しくなった。

実在した日本人でいえば、李徴は中島敦の伯父の斗南先生に似ている。生涯独身のまま七十二歳で死んだ斗南先生は、性、狷介にして善く罵（のし）り、人をゆるすことを知らなかった。漢学（文学）の素養のない者を馬鹿と云い、口語体文章を「日本文章の墮落に候」と批判した。

斗南先生の眼から見れば、言文一致体で書かれた二葉亭四迷の『浮雲』をはじめ日本の近代文学のほとんどは「日本文章の墮落に候」だ。明治以後の文学者で馬鹿でない者は森鷗外、夏目漱石、幸田露伴など漢学の素養のある作家だけだろう。

甥の中島敦は斗南先生の影響を受けて、漢学の素養があつたが、ステイヴンソンの南洋生活記の体裁をとる『光と風と夢』では欧米文学の素養もあることを示している。

三十三歳で早世したが、文名は死後にたかまつた。広く一般読者に読まれてはいないが、『山月記』『李陵』『名人伝』などは教科書に採用されているので、名は死後百年に遺りそうだ。

悪詩悪筆自欺欺人億千万劫不免蛇身 斗南